

歴史を記憶する教育

— 小学生の「アウシュビッツ学習」の実践を中心に —

Education to Memorize History: Focusing on the Practice of Elementary School to Learn about Auschwitz

西村 美智子

NISHIMURA Michiko

1. はじめに

20世紀はたび重なる戦争による痛ましい記憶が刻まれた世紀だった。私たちはそれらの過去の歴史から何を学び、犠牲となった多くの人々、一人ひとりの死の意味にどう向き合ってきただろうか。現在も世界各地で繰り広げられている紛争や戦争による悲惨な光景を目にすると、*“歴史の記憶”* というものが今を生きる人々にどのように投影され、保持または忘却の道をたどっているのか探ってみることは重要なことだと考える。

再び人類の人類に対する暴力、人道に対する罪がくり返されないために、その出来事がいかにして起こったのか、人間性を破壊するような行為がどのような経緯で実行されたのか、そしてどのような結果をもたらしたのか、私たちは知らなくてはならないし、それは現代・未来の歴史への責任でもあるように思われる。

ジャン＝F・フォルジュは、「忘却を願い、歴史のページを急いで繰ろうとする人々は、無意識にせよ死刑執行人（ナチ）の側に身を置いていると言わなければならない。それにくらべ、犠牲者たちの記憶はもっと長く保持される。犠牲者の記憶は真実が承認されることを切に求めてやまないのである。いかに時間がかかろうとも、これだけが苦しみを癒やすことを可能にしてくれるだろうからだ。」（フォルジュ2000：3）と、記憶の保持の重要性について述べている。フォルジュは、フランスの高校でアウシュビッツの記憶を生徒に伝えるために授業にシヨアー¹からの生還者を招いたり映像や映画を利用して、歴史の犠牲者たちの苦悩を想像する力を育もうとするユニークな歴史教育の実践を行ってきた教師である。フォルジュは、われわれにはこの歴史的事実を21世紀の子どもたちに伝える義務があるとし、「たしかにこの蛮行は特殊であるとともに、唯一無比でもあり続けるだろう。けれどもそれはまた、すべての人間にかかわりのある普遍的な側面をもっていることを忘れてはなるまい。非人間的のきわみであった親衛隊さえも、悲しいことに、われわれと同じ人間存在であることに変わりないからだ。」（フォルジュ2000：3）と述べている。

2008年、筆者は勤務していた小学校の6年生にアウシュビッツの学習を試みた。その年の総合学習のテーマに沿って、いろいろな教科や学校行事とも関わらせながら年間を通

して取り組んだ。当時、小学生の「アウシュビッツ学習」の先行実践はあまりなかったように思われたが、日常の子どもたちが様々な社会事象に興味関心、問題意識を持ち、ものごとによって向き合い懸命に考えようとする姿に接し、小学生には難しすぎると決めつけるべきではないと考えるようになった。拙著『平和をつむぐ12歳のメッセージ』に序文を寄稿した小寺隆幸は「12歳の子どもたちは受け身の存在なのではなく、広い世界に船出しようとし、さまざまな問題を自分の生き方と結びつけながら真剣に考えようとする能動的な主体なのである。(中略)今を生きる子どもたちには現実の様々な問題に関心を持ち意見を表明する権利がある」と述べている。(西村2009: 9-10) 子どもたちには「問い続け、深く考える権利」、「想像し、創造する権利」、「自分自身の世界を読み取り、歴史をつづる権利」があるのである。(ユネスコ「学習権宣言」)

本稿では、小学生の「アウシュビッツ学習」の考察を通して、この歴史的事実を学ぶことの意義を明らかにし、犠牲者たちの苦悩を想像し共感できる力を育み、「人間性の創造」に向かわせる授業をどうつくっていくかを探してみたい。それは、20世紀の惨禍を再びくり返さないためには、歴史を記憶する教育が不可欠であることを改めて認識し、さらにそれが、私たちが自国の負の歴史にどう向き合うかという日本の近現代史教育への問い直しを促すものになると考える。

2. 平和学習の実践

「平和ってなんだろう」と、ある年の6年生に問いかけてみた。もちろん「戦争じゃないとき」という答えは真っ先に出たが、次々と子どもたちから発せられたのは「いじめや差別がないこと」「一人ひとりの人権が守られているとき」「家族と安心して暮せる」「自由がある」「民族や宗教での差別がない」「貧富の差がない」等々であった。また、直前に東日本大震災および福島第一原発事故が起こったこともあり、「災害が起きないとき」「放射能におびえないで暮らせる」「家族や友だちがいる」「学校で勉強できる」「夢を見られて実現できる」などが出された。子どもたちは、「平和」の概念を「戦争」の不在ととらえるとともに、ガルトゥングの理論における「構造的暴力」の不在が「平和」であるととらえていた。

ヨハン・ガルトゥングは、戦争や紛争、大量虐殺、テロ、いじめ、家庭内暴力など「直接的な暴力」に対して、貧困、差別、病気、精神的抑圧、環境悪化、基本的人権の欠如など、暴力行為の主体が特定できず、間接的に命や人間の可能性を奪い去るような行為を「構造的暴力」と呼び、その解消、不在を「積極的平和」と定義した。

筆者は、戦争や社会問題に関心を持ち、小学校における平和教育に取り組んできた。平和教育の実践は、民間教育研究団体を中心に、15年戦争、空襲、沖縄戦、広島・長崎への原爆などを題材にした豊富な蓄積があるが、その多くは「戦争」という歴史的事実を通して逆説的に「平和」について考えるという実践であったように思われる。筆者は「戦争」の不在が「平和」であるというこれまでの概念から、「構造的暴力」の解消・不在が真の「平和」(積極的平和)であることを子どもたちにつかませたいと考えた。また、「核」「地球環境」「貧困」「テロ」「民族紛争」など、私たちが直面している現代社会のグローバル

な課題にアンテナを張りながら、身近な「いじめ」「虐待」「格差」「差別」などの問題に目を向け、足下から子どもたちが「平和をつくる主体者」として成長していけるような平和教育の実践をめざした。学習方法としては、体験者や当事者を授業に招いて直接話を聞いたり映画やDVDを視聴したりして、そのできごとや人々の苦悩を想像させようとした。また、絵本や紙芝居、写真集、CDなどを使ったり、地域の遺跡や資料館などを見学したりして子どもたちの感性や思考を深める学習を工夫した。そして、学習のまとめとして、学んだことや自分たちのメッセージを学芸会などを利用して、創作劇という形で表現するという手法をとった。

具体的な実践として、高学年の総合学習において、「バナナからアジアを見つめて」(1999)、「沖縄を学び、踊る」(2000)、「6年生が考えた9・11アメリカ同時多発テロ事件」(2002)、「アイヌの治造さん」(2003)「日韓の過去と未来への道」(2004)、「にくしみを越えて共に生きる道を—朝鮮戦争、ボスニア・コソボ紛争—」(2005)、「ベトちゃん・ドクちゃんからベトナム戦争・アメリカを考える」(2006)、「アンネ・フランク—アウシュビッツ」(2008)、「ヒロシマ・ロスアラモス」(2010)、「3・11つながり合って生きる—憲法と震災・原発」(2011)、「人間は核と共存できるか」(2012)などに取り組んだが、本論文では「アウシュビッツ学習」を取り上げ論述したい。

3. 本教育実践を行った学校について

本実践の場となった学校は東京の西部に位置し、自然豊かなキャンパスに小学校・中学校・高等学校の児童・生徒がともに学ぶ私立学校である。戦時下の1940年に海外からの帰国子女8名のために創立され、「世界を心に入れた人を育てる」を教育理念に掲げ、「民族・人種の違いを超え、互いの人権と一人ひとりの個性を尊重する」を柱に教育実践に取り組んできた。現在も積極的に世界各地からの帰国生や留学生、国際結婚による児童・生徒などを受け入れ、国際色豊かな学校として存在している。

本実践は、「総合学習」で取り組んだものであるが、実践校では「総合的な学習の時間」が実施される2002年以前から独自のカリキュラムで「総合学習」の実践研究を行っていた。「総合学習」とは、子どもが主体となって、教科の枠を越えた価値ある課題を、共同で探究的・体験的に学んでいく学習であるとし、学習テーマは、子どもたちの発達段階や学年の実態、子どもたちの興味・関心、学ぶ必要や価値あるものを考慮しながら決めていくこととした。低学年では、学園の自然環境を生かして、四季の生き物の観察、飼育栽培、物づくりなど五感を通した活動を中心に、この時期にしか培われない豊かな感性を育てていこうとした。3・4年生では、すぐ近くを流れる多摩川を題材に「川」や「水」をテーマにした学習、カイコの飼育や綿の栽培から布を織るまでの取り組みなどに挑戦していった。高学年では、多様な自然や文化、様々な立場の人や価値観を持つ人々と出会わせるなどの体験をきっかけとして、平和・人権・国際理解・環境問題など、現代社会における課題性を持つテーマに取り組んだ。

4. 小学生の「アウシュビッツ学習」

ここで取り上げる「アウシュビッツ学習」は、筆者が平和学習としてじっくり取り組んでみたいとかねがね考えていたものだった。学校に咲く「アンネのバラ」の謂れの学習をきっかけに、毎朝の学級活動の時間を使っての『アンネ＝フランク』の読み聞かせ、「ホロコースト教育資料センター」代表の石岡史子さんをゲストに招いての授業、夏休みのアウシュビッツ・ビルケナウ訪問など、新年度が始まる前から構想を練り計画的に学習を進めていった。

(1) アンネ＝フランクの生涯を知る

学校の玄関に毎年、「アンネのバラ」が美しい花を咲かせる。アンネ・フランクにちなんで名付けられたこの「アンネのバラ」は、別名「平和のバラ」とも呼ばれ、つぼみは赤く、花が開くとオレンジ・ピンクへと色を変えるめずらしい四季咲きのバラである。アンネの父、オットー・フランク氏と偶然に出会った京都の合唱団が、そのバラの苗木を10本譲り受け、その後、接ぎ木で日本中に広められた。そのアンネのバラを、2003年度の5年生が、平和を願う市民グループから苗を2本もらい受け学内に植樹したことが、子どもたちにとって「アンネのバラ」の始まりだった。以来、子どもたちは毎年、アンネのバラが花開くのを楽しみにし、1年生から大切に見守り育てていった。中でも5・6年生は、先輩のバラの世話を引き継ぐとともに「アンネのバラ」に込められた歴史を知る中で、総合学習や社会科、国語等で平和についての学びを深めていった。

6月12日のアンネ・フランクの誕生日をきっかけに、2008年度の6年生の子どもたちには毎朝5分間ずつ「アンネ・フランク」の本を読み聞かせた。最初は、「アンネがかわいそう・・・」「ユダヤ人だけ、どうしてこんなひどいことをされるのか」と同情や憤りの気持ちが前面に出ていたが、読み進むにつれ、「ユダヤ人ってどんな人?」「なぜ、ユダヤ人をナチスドイツが迫害・虐殺したのか」「国民はどうしてヒトラーに従ったのか」「人間とはこれほど残酷なことができるのか」「なぜ戦争は起こるのか」等々、子どもたちの問いは深まっていった。子どもたちは、本やインターネット等で調べたり聞き取りをしたりして、それぞれのテーマについてまとめ発表し合った。

子どもたちの関心の高まる中、ホロコースト教育資料センターの石岡史子さんを講師に招き、ワークショップ「タイムトラベル アンネ・フランク」を実施した。このワークショップは、アンネ・フランクの生涯とアンネが日記に残した言葉を教材にして、ホロコースト²の歴史を知り、命や人権の大切さについて考えることがねらいだった。スライド上映やクイズ、グループワークなどを通して楽しく学習しながら、隠れ家の中を映像で探検したり、アンネの部屋の大きさをひもで作ったり、日記を読み上げたりして、60年前にタイムトラベルするというものだった。活動の最後には、アンネが「Dear Kitty」と日記を書いたように、各自が「Dear Anne」と日記に綴った。その一人の日記を紹介したい。

< Dear Anne >

「あなたは収容所に送られても、平和がもどることを信じ、生きる希望を失わなかったすばらしい人間です。私はアンネをととても尊敬しています。なぜかという、日記にたく

さんの心の奥深くの悩みや思いを自由に書き、あなたとキティ（日記帳）さんのおかげで、平和というものがどんなに大切かが世界の人々に伝えられたからです。アンネがいなければ、私は今、このように手紙は書けません。なぜ、どうやって、隠れ家の生活にたえられたのだろう。私はおどろいています。いろいろなことが苦しかったけれど、きっといつかこの世は平和と自由であふれる世界になると信じていたからかもしれません。あなたは今、存在していません。しかし、アンネは今も人々の心の中に生き続けています。そして、世界に戦争の残酷さを伝えています。そうしなければ、世界は生き続けられないのだから」。

（2）「ホロコースト」の歴史を子どもたちと学ぶ

2008年の夏、筆者は、ポーランドのアウシュビッツ・ビルケナウを訪れた。そして、第二次世界大戦中のユダヤ人差別・迫害・大虐殺の実際を、遺跡や遺物、体験者の話を通して見聞きすることができた。アウシュビッツ強制収容所は、ポーランドの首都ワルシャワから南へ約300キロ、スロバキアとの国境に近いオシュフィエンチムにあり、現在は、ポーランド国立アウシュビッツ・ミュージアムとなり、世界遺産に登録されている。収容所入り口には、かの有名な「ARBEIT MACHT FREI」（働けば自由になる）と書かれたアーチが掲げられ、三角屋根の監視塔が出入りする人々を見据えている。600ボルトの高圧電流が流れる有刺鉄線に囲まれて立ち並ぶ、当時28あった収容棟は博物館として解放され、おびただしい数の遺品や写真、文書等が展示されている。その中でとりわけ衝撃的だったのは焼却炉で焼かれる前に刈り取られた女性の髪の毛、大人の服108万3000着、子どもの服11万5000着、眼鏡12900個、かばん3160個、靴8万足、そのほか、金歯、義足の山だった。この地での犠牲者の数は、少なくとも約110万人と言われており、これらの遺品はそこごく一部と言える。小さな子どもの上着やチョッキ、かわいい靴の山の前では、それを身につけてちょこちょこ歩く姿を想像するだけで胸が締め付けられる思いであった。処刑場であった死の壁、コルベ神父が若い収容者の罪を引き受けて餓死刑にされた地下牢、また焼却炉なども見る事ができた。

次に訪れた隣接地のブジェジンカ、ドイツ名ビルケナウにつくられた収容所は、アウシュビッツ第二収容所としてユダヤ人の大量移送のために増設され、ガス室、死体焼却施設等を備えた絶滅収容所だった。ジェノサイドが本格的に組織的に行われたところである。本線から赤煉瓦の監視塔まで続く単線の引き込み線、ドイツ人医師の指一本で運命を下されたプラットホーム、果てしなく立ち並ぶ300もの収容棟、蚕棚のような三段ベット、まるい穴の続くトイレ、証拠隠滅の為に爆破されたガス室・焼却炉の残骸等々が当時のまま残されている。ポーランドの「政治囚」として収容所に送られながら奇跡的に生還し、35年間アウシュビッツ博物館の館長をつとめたカミュール・スモーレンさん（91歳）の話は深く心に刻まれた。「アウシュビッツで何が行われたか、その事実を証言しなければならない。それが犠牲となったものへの義務なのです。そのために私はなんとしても生き延びなければならないと思いました」。

このような体験を通して、この場所が証す歴史の事実を多くの人に伝え、子どもたちと学びたいと思った。なぜこのようなことが起こったのか、なぜ止めることが出来なかったのか、犠牲者となった人たちの死を前にした思いはどのようなものであったか、この人間

の狂気とも思える行為を二度と起こさせないためにどうすればいいのか。

2学期が始まり、筆者がアシュビッツ・ビルケナウを訪れて見聞したことを子どもたちに話したり、現地ですべてきた写真をスクリーンで見せたりした。子どもたちは終始無言、真剣なまなざしで見入っていた。その後、それぞれの感想を綴った。

「アウシュビッツ収容所は本当に恐ろしいところだと思いました。強く印象に残ったのは、窒息牢です。私はあそこに入れられた人たちはどんな思いで苦しみ、死んでいったのだろうと思いました。木の扉に爪あとが残っているのを見て、ガス室より恐ろしいと思いました」。

「ここまで残虐なことが人間にできるのかと思った。戦争は人を人でなくしてしまうものなんだと思いました。弱い人、老人、子ども、身体障害者も生きる価値があるのに、ガス室で殺すなんて最低だと思います。弱い人でも、生きる意味があるということをナチスの人に知ってほしかったです。今も、いろいろな人の心に悲しみ・苦しみが残っています。その悲しみ・苦しみは消すことができるのでしょうか」。

「自分と同じ人間を殺すということに疑問や悲しみが生まれなかったのかと不思議に思います。そのリーダーだったヒトラーは本当に許せないです。どうして他の人たちがそれに賛成してしまったのかがよくわかりません」。

「もし私がユダヤ人で、理由もないのに強制収容所で重労働を課せられ、死を待つならば、私は生きる希望を失い自殺を考えるとします。スモーレンさんはこの悪夢をみんなに伝えるために歯を食いしばって苦しいことにもたえました。ヒトラーを怖がらず、ナチスに抵抗したのはとても勇気があると思います。私たちがこれからやらなくてはいけないことは、差別やこんなひどいことが二度と起こらないように、この事実を伝えていくことだと思います」。

ユダヤ人に対して残虐・非道の限りを尽くしたナチス・ヒトラーへの怒り・憤り、ナチスに賛成した国民や指一本で人の運命を左右した医者への不信感、過酷な状況の中でも、最後まで人間らしさを失わなかった人々への尊敬、ナチスに抵抗した人々の勇気やこの事実を伝えるために生き抜いた人々への称賛など、いろいろな思いや考えが述べられていた。

(3) 「ホロコースト」はなぜ起こったのか

アウシュビッツの事実を知った子どもたちの多くが抱いていたのが「人間というものは、これほどまでに残虐なことができるものなのか」ということであった。

その答えを探るために、NHKで放映された世界遺産スペシャル「記憶の遺産：アウシュビッツ・ヒロシマからのメッセージ」(2008年3月29日放映、NHK)を視聴した。2008年1月27日の63回目の解放記念日に、アウシュビッツの生き証人たちが仲間を追悼するために集まり、追悼式を催している様子が映し出された。その中で、解放直前に、仲間と脱走して成功した、一人の元囚人のポーランド人、コバルチクさんの体験が語られていた。収容所内での過酷な労働、処刑場であった「死の壁」、11号棟地下の窒息牢、懲罰として拷問された場所などをたどりながら「人間とは・・・」と問う場面がある。一人の脱走兵に対する連帯責任の懲罰として、後ろ手にしばられ宙づりにされて一時間半にもわたる拷問を受けて、絶叫しながら気絶する仲間の声を聞きながら「人間はこんなことができるもの

なのか・・・」。そして、「民族主義的イデオロギーが人間性を打ち破るほど優先され、正当化されるたび、人間は人間にこのようなことができるのです」と続けたのだった。この中に、子どもたちの問いに対する鍵となる言葉があった。人間が同じ人間に対してこのような残酷なことができたのは、「民族主義的イデオロギー」というものが優先され、正当化されたからであるというのだ。子どもたちはナチス・ドイツの非道さと残虐さに憤り、コバルチクさんたちの苦しみ・悲しみに心を重ねながら、「民族主義的イデオロギー」の恐ろしさを感じていた。「民族主義的イデオロギー」とはどういうものであるか、その概念や定義についていろいろな考え方や議論がある中で、ましてや小学生にそれを理解させることは到底無理なことである。ただ、過去・現在において、多様性や自由を認めない自民族中心主義・排外主義のもとで、多くの人命や尊い人権が奪われている事実があり、それらがどのような事態を引き起こすかということだけは、しっかり学ばせたいと思った。

(4) 「記憶の遺産」に、なぜ「アウシュビッツ」と「ヒロシマ」は登録されたのか

アウシュビッツと原爆ドーム、その二つは「記憶の遺産」と呼ばれている。地球上にあるかけがえのない自然や文化遺産を人類すべてにとっての宝物として保護し、後世に残していかなければならないものとして認められ登録された「世界遺産」とどのように違うのか、前述のNHKの番組を通して子どもと一緒に学ぶことができた。広島・アウシュビッツは、二十世紀が生んだ特別の遺産として登録され、その理由は「美しさや建築物としての価値によって登録された世界遺産ではなく、すべての人類にとって象徴的で普遍的なメッセージを持つ」からであると言われている。これらははるか昔の遺産ではなく、現代の私たちがいる世界に大きく関わっている歴史の証人であり、よって「記憶の遺産」と呼んでいるとのことだ。

アウシュビッツは戦後間もなく1947年にポーランドの国立博物館になった。その館長となったスモーレンさんは、「数百万の死者の追悼のためにも、アウシュビッツは記憶の場所として保存されるべきだ」とポーランド国民に提案した。当時の国会はすぐに決定し世界遺産の登録が始まった。1978年にアウシュビッツは世界遺産に登録された。世界遺産にはいくつもの基準があり、アウシュビッツの登録を前提として加えられた基準は「顕著で普遍的価値を持つできごとや思想」である。この新しい基準を提唱したのが登録審査機関の副議長であるポーランド人（ワルシャワ工科大学教授）であった。彼は、このように語っている。「私がそのような世界遺産の登録基準を提案したのは、文化でも自然でもない、歴史という要素が世界遺産の価値として決定的に欠けていると考えたからです。どうして、美しくも建築物としての価値もないアウシュビッツを世界遺産として推薦するのかと問われましたが、私は、『そこは人類の文化が否定された場所ではありますが、それを保存し続けようとする人間の行為そのものは確実に文化の一部なのです』と答えました」。

アウシュビッツの世界遺産への登録が審査された第3回委員会には、加害国のドイツの代表も参加していた。彼はこう述べた。「どの国も世界遺産で自分の国をよく見せたい、自分の国を神秘化したいという多くの誘惑を持っている。ドイツもまた同じです。しかし、アウシュビッツのような歴史の遺産においては全くそのようなことはできません。そこは

犯罪者の記憶と犠牲者の記憶が二重に折り重なっている場所だからです。私たちは犯罪者の罪を肩代わりすることはできません。しかし罪ではなく、記憶を背負っていく責任があります。形がすでに失われていても、記憶と固く結ばれているかもしれない痕跡を守る義務があるのです。アウシュビッツ収容所で命を落とした百万人以上の人々が、死を目前にして浮かべた最後の思いは、残された者のどこかに影を落とし、形として刻まれていると思います。それはまだ私たちの全く気がつかないところにあるのかもしれないからです。ですから、私たちはあの場所を守っていかなければならないのです」。

一方、広島を世界遺産にすることには、当初、中国とアメリカが反対した。アジア・太平洋戦争において、日本軍によるありとあらゆる残虐行為によって膨大な犠牲者を出した中国側の主張、また、戦争を終わらせるためには原爆投下は「しかたがなかった」というアメリカの言い分はそれなりに説得力を持ったものであった。6年生の子どもたちは10月に修学旅行で広島に出かけ、核兵器による惨状や人々の悲劇を遺跡や体験者の証言等を通して実際に聞き知っていた。そのような体験をしてきた子どもたちには、中国と米国の主張は到底受け入れがたいものだった。ある子どもは中国とアメリカの反対について次のように綴った。

「中国が、広島を原爆ドームが世界遺産に登録されるのをしぶったのはよくわかります。私たちの国は中国や韓国、アジアの国々に対して、人間であることを否定するような虐殺、差別をしてきました。私たちはただ頭を下げて謝るしかありません。しかし、アメリカの主張には納得できません。人間の命は尊いものであり、それはみんな平等であるということを知ってほしいです。平和のためとって、人を殺したり原爆を落としたりして暴力的な手段を使うと、また憎しみが生まれて何も変わらないんです。余計にますます平和から遠ざかるんです。戦争をやめさせる手段として、広島に原爆を落としたのはやってはいけないことだったのです。二度とこのようなことをしないために、犠牲になった人々の悲しみ・苦しみをわすれないために、原爆ドームを世界遺産にすることはとても意味があることなのです」。

この子どもは、なぜ「アウシュビッツ」と「ヒロシマ」が「記憶の遺産」として登録されたのかを知る中で、遠い地のアウシュビッツから自分たちの住む日本の広島に目を向け、自国のアジアの国々への加害責任に言及している。修学旅行で訪れた広島で、原爆投下という非人道的な手段で犠牲になった人々の無念、苦しみ・悲しみを知ったことによって、日本が犯した罪によって被害を受けたアジアの多くの人々の同様の苦しみや悲しみに心を馳せ、この子どもは被害者意識とともに加害者意識を持つことができたのではないだろうか。

広島は、アウシュビッツと同じように、人類にとってまさに象徴的で普遍的なメッセージを持った、20世紀の特別な遺産として、記憶していかなければならない場所であることを心に刻んだ貴重な学習であった。

(5) 身近な「アウシュビッツ」を考える

一連の学習の中で、筆者は手元にあった一冊の本『アウシュビッツの子どもたち』(青木2000)という本を子どもたちに読んだ。残された子どもたちの靴、収容所に続く石だたみの写真をめくると、「背をのばして、120センチの高さに渡した横棒の下をくぐって

みよう。くぐれたらどうか？それとも棒に頭がぶつかったらどうか？ 昔、これと同じ棒をくぐらされた子どもたちがいた。棒にぶつかった子は左へ行けと言われ、くぐりぬけた子は右へ行けと言われた。右へ行った子どもたちは、もどってこなかった」の文言ではじまる薄くて小さな本。こんな文言で締めくくられている。

「1945年5月、ナチス・ドイツは滅びた。いま、アウシュビッツには親をさがす子どもたちの泣き声も、子をさがしてドイツ兵とどなりあう親の声も聞こえない。収容所の後はそのまま残され、博物館になっている。ドイツはナチスのしたことを人道に対する犯罪だったと認めて、いまでも償いを続けている。でも、アウシュビッツは本当に終わったのだろうか？ヒトラーは死んだ。ナチス・ドイツも滅びた。でも、ヒトラーを尊敬する人は今でもいる。彼らは「ネオ・ナチ」とよばれ、その数は増え続けている。なぜだろう……。いま、私たちの心の中に『優秀な人間』と『だめな人間』とを分けようとする考えがないだろうか？みんなと同じことをできない人を『だめなやつ』だと決めてしまうことはないだろうか？みんなとちがう意見を言う人を『じゃまなやつ』だと言って、仲間はずれにすることはないだろうか？強い者にきらわれたくなくて、いけないことがわかっているのに、やってしまうことはないだろうか？自分さえ得すれば『他の人なんかどうでもいい』と思うことはないだろうか？あのと時のように……。アウシュビッツは本当に終わったのだろうか？ガス室は本当に消えたのだろうか？120センチの棒は、もうないのだろうか？私たちの心の中に、アウシュビッツは、本当にないのだろうか？」。(青木2000：68) この本を読んで、感想を述べ合った。

「『アウシュビッツはもうないのか』ということは、今の人々に、差別する心、そしてひどいことをしようとする心がなくなっているのかと問うているのだと思います。ぼくはなくなっていないと思います。それはなぜかというと、今でもヒトラーを尊敬する人や特攻隊を夢見る人がいたり、学校でのいじめが終わっていないからです」。

「人は自分が殺されそうになったら、みんな助かりたいと思うからヒトラーの仲間になってしまったりして、人が人でなくなってしまう、殺すのが平気になってしまう。私はそれが本当に怖いと思いました。それに、今も戦争をやりたいと思っている人がいることを知って、そんなことを言えるのは、戦争でなくなった人の悲しみや苦しみを知らないからです」。

「戦争は終わりましたが、差別はいまだにあります。自分とちがっただけでいじめる。私と隣にいる人がちがって当然です。なぜそれがいじめる理由になるのかわかりません。私はこれから差別はしません。差別しているのを見かけたら止めます。アウシュビッツを繰り返さないために。みんながそう思わないと、平和は絶対に築けないからです」。

アウシュビッツは遠い昔のヨーロッパの出来事ではない。いまだに、私たちの身近なところにアウシュビッツが存在し、常に私たち一人ひとりが自分の心に「アウシュビッツはないだろうか」と問い続けていかなければ、再びアウシュビッツがくり返される危険性ははらんでいることをこの一冊の本から子どもたちは学ぶことができた。

(6) チャップリンのメッセージを受け止めた子どもたち

学習の発展として、総合学習の時間を使って、チャップリンの作品「独裁者」(チャールズ・チャップリン 1940)をみんなで鑑賞した。「私は独裁者にはなりたくない。支配は

したくない。できれば援助したい。ユダヤ人も黒人も白人も人類はお互いに助け合うべきである。他人の幸福を念願としてこそ生きるべきである。お互いにくしみ合ったりしてはならない。世界には全人類を養う富がある。人生は自由で楽しいはずである。貪欲は人類を毒し、憎悪をもたらし、悲劇と流血を招く。思想だけがあって感情がないと人間性は失われる。知識よりも思いやりこそが必要である。思いやりがないと暴力だけが残る。兵士諸君、犠牲になるな。独裁者の奴隷になるな。夢を知らぬ者だけがにくしみ合うのだ。人生はもっと美しく、すばらしいものだ！」チャプリン扮する独裁者がラストのシーンで兵士たちに聞かせる台詞である。この演説を世界に聞かせたいために、チャプリンは、この映画を作ったと言われている。あの時代にこのような映画をつくり、ここまでの台詞を言わせたチャプリンの勇気と並々ならぬ決意と覚悟に驚嘆せざるを得ない。映画を見た後、ある子どもは次のような感想を綴った。

「私は世界の喜劇王の作品を見て感動しました。罪のない人々を殺し、嫌いだからといってひどいことをする人は今の世の中にもたくさんいます。チャプリンは、そういう人々に何かを伝えたかったのです。『人間はだれでも心の中にやさしさがある。このような残酷な世の中を変えて、平和で自由なすばらしい国にしよう！』と。この世の中の人々を感動させ、反省させる言葉だと思いました。私も、あの人はあんまり気に入らないと思うときもあるけれど、決して残酷なことをしたり、いやな気持ちにさせたりしないようにしたいと思います」。

(7) 学んだことを学芸会で発表する～「創作劇で私たちの学びや思いを伝えよう」～

2008年10月、学芸会で自分たちがこれまで学んできたことを発表しようということになった。脚本は、自分たちが学んだこと、考えていること、みんなに伝えたいことを出し合い、脚本係がそれらをまとめて、オリジナル作品をつくっていくことになった。「アンネ・フランク」の学習からユダヤ人迫害、ホロコーストへと学習を重ねた自分たちが、人間の狂気とも言える歴史の事実と、その中でも人間性を失わなかった人々の存在を知り、「人間とは・・・」と問いかけていくという劇の構想がまとまった。題は、協議の結果、創作劇「Peace and Freedom～私たちの思いをのせて～」に決まった。その劇の内容とは、以下のようなものであった。

広島を修学旅行で訪れた日本の子どもたちが、イスラエルとポーランドの子どもと原爆ドーム前で出会い、一緒に過去を知る旅に出かけることに。場面は変わって、舞台は第二次世界大戦中のヨーロッパ。そこで見た人間の狂気と善。それらをそれぞれの人物になりきって演じた後、再び現在の等身大の自分たちの場面となり、戦争や平和、人間の愚かさやすばらしさを語り合う。そして、自分たちはどう生きていきたい、どんな世界をつくっていきたいなどの思いや願いを伝えるというストーリーだ。

音響や照明、衣装、大道具などの係もすべて自分たちで担当し、監督・助監督のもとで熱心に練習に励んでいった。子どもたちは生き生きと取り組み充実感に満ちていた。そのときの思いを「私が学芸会で伝えたいこと」として次のように綴っている。

「私が学芸会で伝えたいことは、人々の苦しみ・悲しみ、でも、希望をあきらめずに生きてことです。私が演じるメアリーは、ユダヤ人のサラとピーターに希望を捨てないでと励まししながら、いっしょに一生懸命生きようとする役です。ユダヤ人をかくまっているメ

アリーの優しさや悲しみをこの劇でわかってもらえればいいと思います。人間は信じられないようなおろかなこともするけれど、本当はだれもが平和を願っていると私は信じたいです」。

「戦争をしたり、ユダヤ人を殺す命令をしたヒトラーもみな人間です。人間は、本当に残酷な考えを持ち、人を殺したり、自分が得をするように考えたり、少し自分とちがうと差別し、いじめたりすることもあります。でも、人を助け、みんなのことを考え、お互いに協力して生きていく、そんな考えを持っているのも人間です。人間の心は時にはすごく残酷な心になり、時にはとても優しく人を思いやれる心にも変わります。そんな人間の心を、この劇を通して多くの人に伝えていきたいです」。

「ぼくが学芸会で伝えたいことは『平和な世界』・『差別のない世界』・『自由な世界』ということです。このような大量虐殺をしたのはドイツだけではなくありません。日本も朝鮮人にやりました。少し前まで、黒人も差別されました。この三つの世界をつくっていく中で共通の人々がいました。悪い人たちに抵抗した人たちです。これからはみんなが抵抗して、自由で差別のない平和な世界をつくっていききたいです」。

(8) 人間への愛や希望を語る子どもたち

学芸会本番、子どもたちは全校児童、保護者、教職員の前で自分たちの劇を堂々と演じた。そして会場は感動の熱気に包まれた。本番を演じきったあとの6年生の教室には、おだやかでやさしい空気が流れ、子どもたち一人ひとりの表情には凜としたものさえ感じられた。それは、「やり遂げた」「成功した」という安堵や歓喜のあとにおとずれた、満足感、達成感だったのだろう。それぞれが自分の役になりきり、みんなで創り上げる演劇の楽しさを味わうとともに、子どもたちには自分たちの思い・メッセージを伝えるという目的があった。最終場面にそれらが凝縮されていた。

「私、人間って本当に怖いと思ったわ。戦争とはいえ、人間が人間にこんな残酷なことができるなんて・・・」。

「もちろん、ヒトラー是最悪だけれど、それに賛成した国民にも責任があるんじゃないの」。

「でも、反対したり抵抗したらひどいことをされるんだよ。私だったら、怖くて賛成しちゃうかな・・・」。

「でも、ユダヤ人を助けたり、ナチスを批判したりした勇気のある人もいたよね」。

「私もそんな勇気のある人間になりたいな」。

「今だって、ふつうの人たちの心の中にアウシュビッツが潜んでいるかもしれないよ」。

「自分たちと違うからっていじめたり、自分さえ安全だったらと見捨てたりしてしまうこと、ない？」。

「たしかに、今もアウシュビッツは終わっていないかもしれないね。差別やいじめ、無関心」。

「しかし、この瞬間も平和と自由を求めてたたかっている人もいる」。

「僕は戦争に反対する勇気のある人になりたいなあ」。

「人間って愚かなこともするけれど、本当は優しい心を持っていて、平和を願っているんだよね」。

「人間はお互いを愛し合えるすてきな心を持っているって、私は信じたいなあ・・・」。

これらの文言は、子どもたちの学びから生まれたものであり、一言ひとことが現実の世界や自分自身を見つめながら、人間の有り様を問い、人間への愛や希望を語る熱い思いにあふれたものだった。

かつて父親の転勤で家族でオランダに住み、5年生の時に帰国してきた児童の母親は次のように学芸会の感想を綴った。

「オランダに住んで、ナチスのユダヤ人に対する迫害の歴史を見てきた私たちにとって、その卑劣な行為や苦悩するユダヤ人の心情を見事に演じた子どもたちに魅了されました。何度となくアンネの家を訪れましたが、そのたびごとに胸の中をえぐられる悲しみにさいなまれ、痛ましい過去はいつまでも心の中に何かを問いかけてきました。それがまさしく、今回のテーマ『Peace and Freedom』だったのです。人類の二大狂気と言われる『広島への原爆投下』『アウシュビッツのユダヤ人殺戮』は、我々同じ人間が起こした行為であると思うと、本当に悲しく思います。このことをよく認識した子どもたちには是非、未来を平和に過ごすことのできる世界を作ってほしいと思います。また、我々親、大人も平和な世界のために何をすべきか、今一度考える必要があることを痛感しました。6年生のすばらしい演技に拍手を送ります」。

また、他の保護者は次のような感想を寄せてくれた。

「この劇を通して、子どもたちの小さな心にも、差別や戦争への強い意見を持つことができるいい機会を与えられたことと思います。『ヒトラー政権の悪さは目立ったけれど、私たちの周りでも似たような差別をしていないか?』と問いかけるところが、私の好きな所でした。自分の周りの小さな所にさえ潜んでいる差別を見つめ直してほしいという訴えこそが、身近な『Peace and Freedom』ではないかと考えさせられました」。

「6年の集大成とも言える今回の学芸会、一人ひとりの生徒が『Peace and Freedom』のテーマにのせて役になりきり、それぞれの思いをどのように表現すればよいかを研究し、真剣勝負で自分の役割を果たしていました。正義感の中に自分の弱さがあることに気づきはじめた時期の子どもたちにとって、演じることによって、人の罪の深さとゆるしについてさらに考える機会を与えられたと思います。この学芸会を通して、いろいろな場面で感じた『気づき』をこれからの生活の中に取り入れることができたなら、本当の意味で、熱い思いで取り組んだ学芸会の成功といえるでしょう。期待しています」。

「アウシュビッツ」学習の締めくくりとして、子どもたちは作文を書いた。学芸会の成功を喜び、満足する文章を綴った子どもが多い中で、次の作文は目を引いた。

「心の中にひそむアウシュビッツ」

パチパチ……。幕が閉まる。閉まったとたん、声には出さなかったけれど、みんな（ヤッ

ター) と思っていたと思う。表情を見ていると、みんな笑顔ででき合っていたり、飛び上がって喜んでいたり……。いろんな人からも、「何度見ても感動した」と言われ、「劇は大成功」と言いたいところだが、本当にあの劇は成功したと言えるのだろうか。本当は、うらで人の悪口を言っている人を何度も見たことがある。でも、それを止めようとしなくても自分もいるのだが……。(世界を平和にするって言っているけれど、人間関係うまくいかにいくせに、どうやって平和にするの？ 少しの悪口も止められない自分が、世界を平和にするなんて無理じゃん) というのが私の気持ちだ。決して、悪口を言っている人だけが悪いわけではないと思う。それを止めようとしなくていい私のような人も悪いと思う。結局はヒトラーを批判しなかった人たちと同じだと思う。(言ったら自分がいじめられるかもしれない。言っただけで言わなくていい、結局同じなんだったら、言わなくていいや) と思い、自分が安全だったらいいと思っていたと思う。

でも、学芸会やいろいろな学びを通して、自分が犠牲になっても、人のためにつくせるような人になりたいと思うようになった。世界平和を望むなら、まず自分の身の回りから平和にしたい。しかし、イジメというものがある。私ははっきり言って、いじめは無くなると思う。私たちのように勉強している人がいないからだ。人はなぜ、横で苦しんでいる人がいても、何も感じず戦争をくり返すのだろうか。なぜ、悪口を言われることがいやだとわかっていても、悪口を言い続けるのだろうか。なぜ、小さいときには戦争はいけないとわかっていても、大人になるとそれがわからなくなるのだろうか。人はなぜ、人を苦しませようとする心をもつのだろうか。大人になっても、決して今思っていることを忘れたくない。きれいな広い心を持ちたい。たとえ、自分が生きている間に世界が平和にならなくても、次の世代の人が平和に暮らせるよう働きかけるような、そんな大人になりたい。

自らの足下に目を向け、陰口や無関心、同調や無抵抗など人間のずるさ、弱さ、愚かさを振り返りながら、身近なアウシュビッツ、平和を求める自分自身の心を正直に告白している。そこから、一連の学習を通して変容した自分を自覚し、大人や自分たちに人間の生き方や社会のあり方を問いかけ、未来の自分や世界への希望を熱く語っている。

5. 小学生の「アウシュビッツ学習」の意義と学習方法

一連の「アウシュビッツ学習」において、小学校6年生が過去の歴史におけるおぞましい事実をどのように受け止め、何を考え、未来につなげていこうとしたか、いろいろな学習や体験を通しての反応や感想、意見などからこの学習の意義と小学生の学習方法について考察してみたい。

小学生という時期にこのような「人間性を貶める肉体と精神への暴力」について学ばせることが果たして適切なのか、心的外傷(トラウマ)を生むことになりはしないか、危惧する声もあると思われる。当然のことながら、純粋で柔らかい感性を持つ小学生に与える衝撃や拒否反応も予想される。しかし、この歴史的事実から目をそらすわけにはいかない、私たちはこれらの出来事を未来に生きる子どもたちに伝える役目があると考え、小学

生にふさわしい学習方法を探りながら実践に取り組んだ。あまりの残虐非道な行為に幼い心や頭が思考停止になることがないように、人間への信頼を失い自虐的になることを避けるために学習方法や教材についてはできる限り配慮したつもりである。「アンネのバラ」が咲く教育環境を生かして「アンネ・フランク」の本の読み聞かせから学習をスタートさせ、小学生が活動的に楽しく学べるようにワークショップを取り入れたり、自分たちの学習のまとめとして学芸会で劇を上演するという表現形態を試みた。また、どの学習においても、アウシュビッツやヒロシマをはじめとする歴史の犠牲者の苦悩を想像し、共感する力を生み出すことを大切に考えてきた。また、極限状態においても人間の非道を伝えるために生きぬいた人々の勇気や誠実な生き方に感動し、人間を信頼し未来の社会や歴史への希望が持てるように学習を締めくくることが、小学生の学習方法にふさわしいと考えていた。

アウシュビッツ・ビルケナウでのおぞましい歴史の事実を子どもたちはどのように受け止め、考えただろうか。「窒息牢に入れられた人たちはどんな思いで苦しみ死んでいったのだろうか」「ここまで人間は残虐なことができるものなのか。弱い人、老人、子ども、障がい者も生きる価値があるのにガス室で殺すなんて最低だ」「自分と同じ人間を殺すということに疑問や悲しみが生まれなかったのか。そのリーダーだったヒトラーは許せない。どうして他の人たちがそれに賛成してしまったのか」と、犠牲になった人々の苦しみや悲しみへの共感、残虐非道の限りをつくしたヒトラーへの怒り、その思想や行為に同調し加担した人々への不信感を表明している。

一方、アンネ・フランクに対して「あなたは収容所に送られても、平和がもどることを信じ、生きる希望を失わなかったすばらしい人間だ。きっといつかこの世は平和と自由であふれる世界になると信じていたかもしれない」また、ポーランドの「政治囚」として収容所に送られながら奇跡的に生還したスモーレンさんに対して「この悪夢をみんなに伝えるために歯を食いしばって苦しいことにもたえた。スモーレンさんはヒトラーを怖がらず、ナチスに抵抗したのはとても勇気があると思う」そして、チャプリンの映画を観て感動した言葉として挙げた「人間はだれでも心の中にやさしさがある。このような残酷な世の中を変えて、平和で自由な素晴らしい国にしよう」など、過酷な状況の中でも、最後まで人間らしさを失わなかった人々への尊敬、ナチスに抵抗した人々の勇気や称賛などが読み取れる。

この学習の集大成ともいえる学芸会の上演を控えて、「人間は本当に残酷な考えを持ち、人を殺したり自分が得をするように考えたり、少し自分とちがうと差別しいじめたりすることもある。でも、人を助け、みんなのことを考え、お互いに協力して生きていく、そんな考えを持っているのも人間だ。人間の心は時にはすごく残酷な心になり、時にはとても優しく人を思いやれる心にも変わる。そんな人間の心を、この劇を通して多くの人に伝えていきたい」と述べる子どもの姿があった。本番の劇の中では、子どもたちは、次のように語り合っている。「人間って愚かなこともするけれど、本当は優しい心を持っていて、平和を願っているんだよね」「人間はお互いを愛し合えるすてきな心を持っているって、私は信じたいなあ・・・」。

一連の「アウシュビッツ学習」が「人間性の創造」に向かって子どもたちの感性や思考を鍛え、あらゆる種類の暴力を否定し平和を創り出す主体者へと子どもを成長させる積極

的な意味を持つ学習であると実感した。

6. 自国の負の歴史と向き合う

学芸会後の12月9日に、歴史の授業でシンガポール人の保護者（父親）を招き、アジア・太平洋戦争中の話を聞く機会を持った時のことである。父親の話は、日本軍の占領下でマレー人やタイ人がどのような生活を強いられたかについてわずかに言及しただけで、戦争中の日本国民の苦しい生活にも思いをはせた、怒りや憎しみを越えた未来志向的なものだった。しかし、後半の質疑応答の中で、子どもたちは、シンガポールの小学校・中学校の教科書には、日本統治下のシンガポールの様子、人々の厳しい暮らし、日本軍の残虐な行為がくわしく書かれていることを知った。

そんな中、娘のゆりが顔を覆って泣いているのに気づいた。ゆりは、シンガポール人の父親と日本人の母親の間に生まれ、父親の母国で5年生まで教育を受けてきた。一緒に付き添って来ていた母親が、ゆりがなぜ泣いているかを話してくれた。シンガポールの社会科教科書「小学校4年生B」を紹介しながら、「ゆりはシンガポールの学校で、この教科書を使って学習していたのです。みなさん想像してください。ゆり以外はみんなシンガポール人、日本人の血が流れているゆりをお友達がどのような目で見、どんなことを言われたか・・・」。母親も涙ぐんでいる。会場はしんと静まりかえった。何人かの子どもたちも泣いている。残虐なことをした日本軍への怒り、被害にあったシンガポールの人々の苦しみ・悲しみ・憎しみ、日本人を許せないという気持ちへの共感、一方で、加害者として非難の目にさらされつらい思いをしたゆりへの同情、「ゆるす」ということの大切さ・むずかしさ。子どもたちは、クラスメートのこぼした涙からいろんな思いを抱いた。

最後に、父親は再び子どもたちに語った。「人をゆるすことは勇気がいる、戦いをしたり、人を殺すことより勇気がいる」と。この授業のあと、ある子どもは次のように綴った。

「学芸会を通してユダヤ人差別をたくさん学んできました。私はいつもヒトラーに賛成した人が悪いとか、こういうことがいけないとか書いてきました。でも今回、ゆりさんのお父さんの話を聞いて、私たちがヒトラーが悪いなんて言えるのかと思いました。自分たちの国の過ちを知らないで、あの人が悪いと言えるのでしょうか。ちがう国のいけないところはちゃんと勉強するのに、自分の国のあやまちを勉強しないのはよくないと思います。なぜ、勉強しないのでしょうか。本当に戦争をしない平和な国になってほしいなら、日本がやったことがたとえ恥ずかしくても、子どもに伝えるべきだと思います。たとえ攻撃したのが私たちではなくても、ゆるしてもらえるまで謝るべきだと思います。日本の教科書では、戦争の事実をあまりくわしくのせていません。昔やったことを今の子どもたちに教えないってことは、知られたくないってことだから、私たちを信じていない、認めていない気がして少し悲しいです。私はこの事実を多くの人に伝えなくてはいけないと思うし、教科書も変えるべきだと思います。本当に平和な世界でくらしたいなら、国全体の考えを変えなくてはいけないと思います。しっかり事実を知って、日本人として生きていきたいです」。(2009：日韓歴史教育交流会)

7. おわりに

「アウシュビッツ学習」を通して、「人間性の創造」に向けて一步踏み出した子どもたちであるが、身近な社会や学校における差別や偏見、無関心や同調姿勢から足もとの「アウシュビッツ」に関心を深め、遠いヨーロッパでの出来事を自分自身にたぐり寄せて考えることができた。

「アウシュビッツは終わったのか」という問いに対して、「戦争は終わったけれども、差別はまだある。自分とちがっただけでいじめ、ひどいことをしようとする心はなくなっていない」「今でもヒトラーを尊敬する人や特攻隊を夢見る人がいたり、学校でのいじめは終わっていない」と、日常の生活体験からいまだに私たちの身近なところにアウシュビッツが存在すると言い切っている。そして、「アウシュビッツをくり返さないためには、身近な差別やいじめを止めなければならない。止めなければ、結局はヒトラーを批判しなかった人たちと同じだ。自分は差別をしないし、差別している人を見かけたら止める。そうしないと、平和は絶対築けない」と、自分自身の人間としての生き方や社会のあり方への思いを語っている。

また、原爆ドームの記憶遺産をめぐるアジアの国々の視線をきっかけに日本の負の歴史に目を向け、加害の事実を直視しようとする姿が見られた。「このような大量虐殺をしたのはドイツだけではない。日本も中国や朝鮮の人たちにやった」「中国が、広島原爆ドームが世界遺産に登録されるのをしぶったのはよくわかる。私たちの国は中国や韓国、アジアの国々に対して、人間であることを否定するような虐殺、差別をしてきた。私たちはただ頭を下げて謝るしかない」と。そして、「原爆ドームが世界遺産になってよかった。見るたびに戦争のことを思い出し、もう戦争をやってはいけないと気づかせてくれる。アウシュビッツと同じように、平和への大切なメッセージを伝えるところとして、いつまでも記憶に残しておかなければならないところだと思う」と。

私たちは歴史の事実、人々の苦しみ、犯した過ちをけっして忘れることなく記憶し続けなければならない。国家や指導者の罪を肩代わりすることはできないが、「記憶を背負っていく責任がある」ということを深く心に刻んだ学習となった。

フォルジュの著書の「解説」の中で、高橋哲哉は「自国の負の歴史と向き合うことを『自虐史観』などといって切り捨てる考え方は、フォルジュ氏の実践する、21世紀の子どもたちに20世紀の悲惨を繰り返させないための歴史教育とは対極的なものでしょう。いかなる国であれ、自国の負の歴史を直視することなく、歴史の教訓を未来に生かすことはできないのです。」(フォルジュ2000: 309)と述べている。戦後、日本社会が自国の戦争責任とどう向き合ってきたのか、子どもたちに負の歴史を直視させる授業をどのようにつくってきたのか、改めて日本の近現代史教育のあり方が厳しく問われている。

フォルジュは次のように呼びかけている。「よりよい世界への可能性へと向かう、たゆみない忍耐強い希望だけが、知識を授け子どもを教える職業を選んだ人々を、行動に立ち上がらせることができる」。(フォルジュ2000: 6) 私たちはこの呼びかけにどう応えるのであろうか。

注

<注記と考察>

- (1) ナチのユダヤ人絶滅作戦を、ヘブライ語起源の語で「ショアー」と呼ぶ。
- (2) 「ホロコースト」とは、元は「焼いて捧げるいけにえ」という意味のギリシャ語で、17世紀には「大虐殺・皆殺し」を意味するようになった。現在では、第二次世界大戦時のナチス・ドイツによるユダヤ人虐殺（1933-1945）を表す言葉として使われている。

[引用文献]

- 青木進々『アウシュビッツの子どもたち』グリーンピース出版会、2000
- ジャン＝F・フォルジュ、高橋武智訳『21世紀の子どもたちにアウシュビッツをいかに教えるか』作品社、2000
- チャールズ・チャップリン『独裁者』（1940）朝日ビデオ文庫、チャップリン作品集 Vol.7
- 西村美智子『平和をつむぐ12歳のメッセージ 地球時代を生きる学力』かもがわ出版、2009
- 西村美智子「ホロコーストの学習からアジアを見つめる」日韓歴史教育交流会発表拙稿、2009
- NHK『探検ロマン世界遺産スペシャル「記憶の遺産」：アウシュビッツ・ヒロシマからのメッセージ』（2008年3月29日放映）
- ユネスコ「ユネスコ学習権宣言」1985（藤田秀雄編著『ユネスコ学習権宣言と基本的人権』教育資料出版会、2001に収録）

[参考文献]

- 安斎育郎『原爆はなぜ落とされたのか』新日本出版社、2004
- 石渡延男・越田稜『世界の歴史教科書』明石書店、2002
- E・フランクル 原典1946、『夜と霧』霜山徳雨訳 みすず書房、1985
- 川喜多敦子『ドイツの歴史教育』白水社、2005
- 熊谷徹『ドイツは過去とどう向き合ってきたか』高文研、2007
- 黒川万千代『アンネ・フランクーその15年の生涯』合同出版、2009
- 佐藤学『「学び」から逃走する子どもたち』岩波ブックレット No.524、2000
- 塩川伸『民族とネイション：ナショナリズムという難問』岩波新書、2008
- スーザン・ソントグ、北條文緒訳『他者の苦痛へのまなざし』みすず書房、2003
- 塚本智宏『ヤヌシュ・コルチャック『子どもの権利』の探求』稚内北西学園大学紀要第2

号、2002

中川美登利『アンネ＝フランク』講談社、1984

中谷剛『アウシュビッツ博物館案内』凱風社、2005

中野光・小笠毅『子どもの権利条約』岩波ジュニア新書、1996

西村美智子「広島での学びから憲法学習へーヒロシマを知ること、それは未来を考えること」『歴史地理教育』2009年5月号

ファルク・ピンゲル、近藤孝弘『和解のための歴史教科書』NHK出版、2008

堀尾輝久『地球時代の教養と学力』かもがわ出版、2005

ヨハン・ガルトゥング、高柳先男・塩屋保・酒井由美子訳『構造的暴力と平和』中央大学出版部、1991

Received : October, 3, 2017

Revision received : November, 21, 2017

Accepted : December, 6, 2017